

没後一躍脚光を浴びた孤独の画家 田中一村展

千葉市美術館 2021. 01. 05～02. 28

本展は、千葉市美術館拡張リニューアルオープン・開館 25 周年記念/川村コレクション受講記念として開催され、奄美で花開いた昭和の画狂人「田中一村」(1908～77) の亜熱帯の植物や動物を迫力ある画面で捉えた作品の展示である。

画伯は、奄美に渡る前の 20 年間で千葉で過ごし、生涯を通し最大の支援者であった同地在住の「川村家」から、当美術館は「おそらく最後のまとまった資料」の寄贈寄託を受けた。これらの資料から、画業の知られざる一面が浮かび上がるとされ、初めて未公開の作品や資料を含めてまとめて展示され注目されている。



《椿図屏風》 1931年 東京時代 絹本金地着色
二曲一双のうち

画風の転換期で、金地に溢れんばかりに咲き乱れる赤と白の椿が、なんとも艶やかでその迫力と美しさに圧倒される。彩色の強さと細密な描写とを併せ持つ作品は、「速水御舟」からのひらめきが伺われ、類例のない画風として注目されている。



《仁戸名蒼天》 1960年千葉時代 紙本着色・額装

画伯が千葉の「川村幾三氏」を頼って千葉寺に移転して、自給自足の生活をしながら、精力的に住まい周辺をスケッチしていた頃の作品である。かつての農村「仁戸名(にとな)」の牧歌的な風景様子で、点景には農婦が乗る牛が引く牧歌的な様子が描かれている



《アダンの海辺の図》旧仮題《アダンの海辺》

1969年 奄美時代 絹本着色・額装

画伯によれば、「この絵画の主要目的は、乱立する夕雲と海浜の白黒の砂礫であって成功した」とされる。

手前に海岸線の量感ある亜熱帯地方産の植物アダンを、明るい空を遮るように立はだかる大きな雲は、迫りくる荒らしの前触れであろうか。手前の細かな波、海岸線の砂礫を一粒ずつ置くように描くなど、近景から水平線まで気が遠くなるような丹念な作業で仕上げられている画伯の最高傑作である。